幼児の教育　第107巻　第9号　平成20年9月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

9
2008

第107巻　第9号　日本幼稚園協会

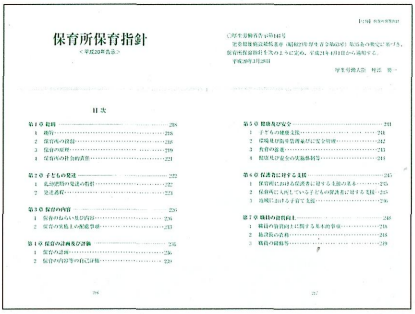
新刊

保育所保育指針解説書

厚生労働省／編

平成２０年に改定された『保育所保育指針』の厚生労働省による公式解説書。告示化された保育指針の趣旨が理解され、また各保育所がそれぞれの特色を生かし、創意工夫を図っていくための助けとなるように作成された1冊。

353-10


保育所保育指針
<平成20年改定>

目次

第１章 総則 …… 258
1 趣旨 …… 258
2 保育所の役割 …… 258
3 保育の原理 …… 259
4 保育所の保育内容等 …… 259
第２章 子どもの発達 …… 222
1 乳児期から発達の特徴 …… 222
2 発達過程 …… 223
第３章 保育の内容 …… 250
1 保育のねらいと内容 …… 250
2 保育の実施上の配慮事項 …… 253
第４章 保育の計画及び評価 …… 256
1 保育の計画 …… 256
2 保育の内容等の自己評価 …… 259
第５章 健康及び安全 …… 211
1 子どもの健康支援 …… 211
2 環境及び衛生管理並びに安全管理 …… 212
3 食育の推進 …… 213
4 緊急時及び事故の発生時対応 …… 214
第６章 保護者に対する支援 …… 215
1 保育所における保護者に対する支援の基本 …… 215
2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援 …… 215
3 地域における子育て支援 …… 216
第７章 職員の資質向上 …… 248
1 職員の資質向上に関する基本的事項 …… 248
2 組織的な取組 …… 248
3 職員の研修等 …… 249

巻末に「保育所保育指針条文」掲載

目次

- 保育所保育指針解説

付録

- 保育所保育指針
- 保育所保育指針等の施行等について
- 保育所保育指針の施行に際しての留意事項について

保育士をはじめ職員の方、保育関係者さらに保護者 必読の本

21×15cm / 264頁
定価200円（税込）

キンダーブックの
フレーベル館

わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第107巻　第9号

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第107巻　第9号

もくじ

巻頭言
省察的実践者としての保育者　三輪建二　4

特集　『幼児の教育』ネット公開をめぐって
もう一つの「幼児の教育」のはじまり　浜口順子　8
『幼児の教育』誌の電子化・ネット化によせて　本田和子　10
掘りやすくなった「宝の山」　豊田一秀　16
〈啓蒙誌〉の時代とその使命　首藤美香子　20
歴史研究の想像力　加島大輔　24
多くの母親・保育者のために　向山陽子　28

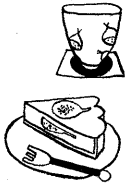
子どもが友達と出会って
自分づくりをしていく過程　山田陽子　32

子どもを語るということ
―精神分析を手掛かりに―　秋山茂幸　40

子どもと保育の情景(21)
着実さとていねいさ　戸田雅美　48

保育の現場から
一学期と二学期の「あいだ」とは　横井紘子　52

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(21)
「みんなでみんなをみる保育」考　佐治由美子　58



巻頭言

省察的実践者としての保育者

三輪　建二

平成十九年に監訳者として、ドナルド・A．ショーンの『省察的実践とは何か』（鳳書房、二〇〇七年）の刊行を手伝いました。アメリカの組織心理学者ショーンの書物は、東京大学の佐藤学先生や秋田喜代美先生の手による部分訳（『専門家の知恵』ゆみる出版、二〇〇一年）が出ていますが、今回は全訳を行いました。ここではこの書物の中から、保育者にとってヒントになり得る文章を幾つか引用したいと思います。とはいうものの、ハウツー的な説明ではなく、あくまで保育者自身で自らの実践を省察していく際の手掛かりにとどまるものになることをお断りします。

一．技術的合理性の枠を超えるということ

保育者は絶えず、幼児一人ひとりとコミュニケーションを図っています。私は成人教育の場面で、成人学習者である専門職の方々と接することがありますが、専門職の

中で保育者は、医師、看護師、保健師、エンジニア、企業内教育担当者などと比べると、一定の理論や法則を保育実践にそのまま当てはめようとする考え方（技術的合理性の考え方）はあまり強くないようです。

保育という営みを、保育理論を当てはめるもの、因果関係で成り立つものと考えず、その都度ふさわしいやりとりを考え、幼児に働きかけ、ふり返っている保育者たち。一見するとそれは、保育理論や教育理論に裏打ちされない、いきあたりばったりの行為に見えがちです。保育のもつ技法や法則性を身に付けて実践したいという願望にかられる保育者も少なくないはずです。

しかしながらショーンは、このような、いわば「暗黙知」に基づいた保育実践・教育実践を行うことは素晴らしいことであると考えています。彼は、保育者や教師自身が技術や方法を適用する技術的熟達者から、実践をしながら「行為の中の省察」を繰り返す省察的実践者になる必要があると言うのです。

省察的実践者としての教師は、生徒たちに耳を傾けようと試みる。教師はたとえば、生徒の状況に対面して一連の問いを自分自身に投げかける。この場合この生徒はいったいどのように考えているのだろうか。生徒の混乱はいったい何を意味しているのだろう。生徒がすでに知っているやり方はどのようなものなのだろうか。……（中略）授業場面において、それぞれの生徒はそれぞれに異なった理解と行為の現象を表す。それぞれの生徒はひとつの世界を形作っている。その潜在力、直面

する問題、そして仕事のテンポは、教師の仕事のデザインに基づいた行為の中の省察によってとらえられなくてはならないものとなる（ショーン、二〇〇七、三百四十九頁）。

二．カンファレンスなどにおいて実践を物語ること

保育の現場では、保育者の能力開発という観点から、公開保育や保育実践をめぐるカンファレンスが盛んに行われているようです。カンファレンスにおいて保育者が自らの保育実践について参観者に説明し、他者からアドバイスを受けることは、マニュアルを通して保育実践を学ぶことよりも身に付くことが多いものですが、実際にはあまり評判がよくないようです。先輩から後輩への厳しい指導や詰問の場になりかねないところがあるためです。

もし可能であれば、保育者が自らの保育実践を〈物語る〉カンファレンスを定期的に取り入れるのが望ましいといえるでしょう。というのは実践を物語ることを通して、自分自身の中に身に付けていた、今まで気づくことのなかった暗黙知に気づき、省察し、変容することができるようになるためです。

実践者が、「実践の中の研究者」として働くときは、実践それ自体が刷新の源泉となる。不確実性によって生じた誤りを認識することは、自己防衛の機会ではなく、むしろ発見の源泉となるのである（三百十六頁）。

そのためには聴き手も、ただ改善点を指摘するのではなく、語り手が暗黙知に気づき省察できるよう、物語の文脈に沿って聴く姿勢が大事になります。

三．実践と省察のサイクルを創るということ

省察的なカンファレンスを通して、保育者はそこで気づき、省察し、次の保育実践に活かすようになり、さらにはその保育実践を再び省察し、次に活かしていくというサイクルを創り出せるようになります。この実践と省察のサイクルを創り出すことは、〈実践者〉である保育者が同時に新しい意味での〈研究者〉になっていくことを意味しているとショーンは述べています。

（省察的実践では……筆者注）研究とは実践者の活動にほかならない。研究は実践状況のもろもろの特徴によって引き起こされ、ある時点で引き受けられ、ただちに行為とつながるものとなる……研究と実践との交換は直接的であり、「行為の中の省察」はそれ自身がまた手段となるのである（三百二十六頁）。

良き省察的実践者であり続けることを、私自身も肝に銘じて教育に携わっていきたいと思います。

（お茶の水女子大学）

引用文献

ドナルド・A．ショーン著　柳沢昌一監訳　三輪建二監訳『省察的実践とは何か

特集『幼児の教育』ネット公開をめぐって

もう一つの「幼児の教育」のはじまり

浜口順子

『幼児の教育』のバックナンバーがインターネットでも読むことができるようになります。『幼児の教育』のルーツは一世紀以上前、一九〇一（明治三十四）年、『婦人と子ども』という誌名で刊行された創刊号にさかのぼります。戦後昭和二十八年までのものは『復刻版幼児の教育』（名著刊行会）として復刊されており、貴重な歴史資料として活用され、おなじみの方も多いと思います。

『婦人と子ども』は幼児教育の研究団体として結成されたフレーベル会（後の日本幼稚園協会）によって発刊されましたが、その所在地が東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）附属幼稚園であったため、お茶の水女子大学附属図書館による同大学の研究発掘と公開を目的とした「リポジトリ」に収蔵されます。

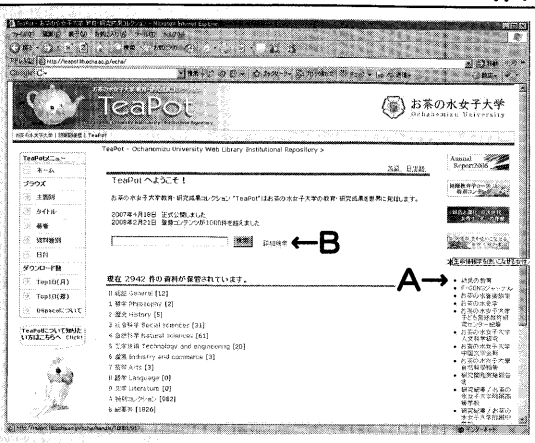
現代における保育・幼児教育の問題に対処するのに、対症療法的な実践、ハウツー的な技術論、行政対応的な思考がもっとも危険であると危機感をもって、『幼児の教育』は現在も発行し続けております。この一世紀の間の子育て・保育について、過去の人々がどのように悩み知恵を働かせてきたのかを謙虚に振り返る姿勢が必要であると信じ、多くの方にアクセスしやすい方法を選びました。しかし果たして、本誌がネットで手軽に検索閲覧できるようになることがプラスの影響ばかりをもたらすかどうかは未知の部分です。読者の皆様にも見守っていただきたく切にお願い申し上げます。

（編集主幹）

「幼児の教育」ネット検索方法

まずは、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション "TeaPot"
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/ へアクセス

①



①-A TOP頁の右側の「幼児の教育」をクリック。
①-B 検索欄に「幼児の教育」と入力しクリック。

お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション "TeaPot" 検索方法

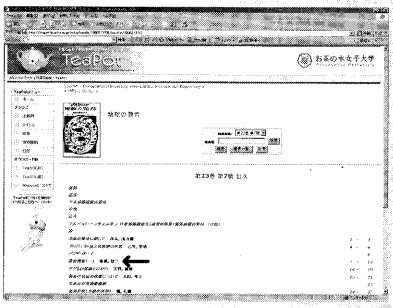
①-Bの検索欄に、直接検索したいキーワード（タイトル・著者・資料名など）を入力すると、Teapotに登録されている関連記事をすべてピックアップすることができます。

例＞「倉橋惣三」と入力すると倉橋惣三に関係するすべての記事をピックアップできる。

②

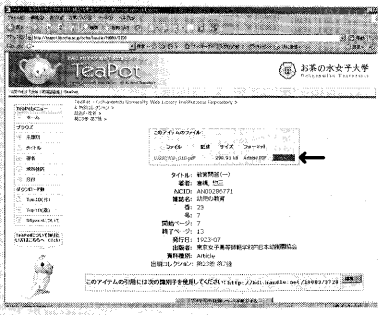
②「幼児の教育」の頁で、閲覧希望の巻数・号数を探してクリック。

③



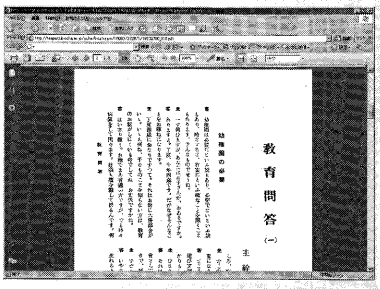
③ご希望の号の目次の頁で、希望の記事のタイトルをクリック。

④



④タイトル、著者、掲載巻・号数など確認後「View!」ボタンをクリック。

⑤

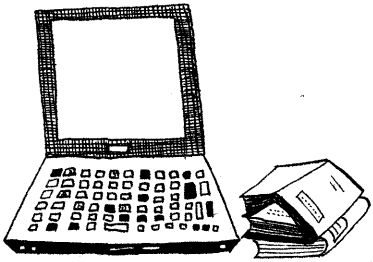


⑤別ウインドウでPDFファイルが開き、指定の記事の全頁を閲覧。

この９月号がお手元に届くころには、創刊号から昭和28年発行分までは公開されている見込みです。その後、発行後2年以上たったものから順次公開していく予定ですが、準備が予定より遅れておりますことをここでお詫び申し上げます。
疑問やご意見などございましたら、youjimail@yahoo.co.jpまで、ご連絡いただければ幸いです。

『幼児の教育』誌の電子化・ネット化によせて

本田和子



大学や研究所などで、「リポジトリ」システムの導入が進んでいるという。「リポジトリ」システムとは、各研究機関で産み出された学術論文を電子情報としてサーバーに蓄積し、ホームページで公開するシステムのこと。結果として、各地各部局に散在する研究者たちは、検索によって必要な学術情報を捜しだし、自身の研究に無料で活用できることになった。高額な研究誌等の購入が困難であったり、世界各地の先端的研究機関と充分な交流を行い得ない小規模研究機関に所属する研究者にとっては、まさしく新時代の福音と言うべきであろう。

学術雑誌の価格高騰を嘆き、複数の大学による共同購入などが検討されていた時代から、十年も経ないうちにこうした時代が訪れる。しかも、これらの

変化が、テクノロジーの急激な進歩によってもたらされたものであることに思いを致すなら、今後、よりいっそう、私どもの予測を越えた事態が出現するであろうと思われて、いささかの感慨にとらえられる。

◇　◇　◇

最古の国内誌という歴史を誇る『幼児の教育』誌も、情報の電子化・ネット化を進めるという。小規模過ぎていささか可憐（かれん）ではあるが、本誌もまた、「リポジトリ」システムを導入するということだろうか。情報は過去にさかのぼって収集されるということだから、本誌掲載記事を過去から現在まで、長期にわたって展望したり活用したいと望む人々にとっては朗報に違いない。何しろ、いちいち図書館まで足を運ぶ必要もなくなるだろうし、そこでさらに部厚な復刻版をめくる必要もなくなるであろうからである。

とは言うもののこの雑誌は、いま、そうした研究者たちの熱いまなざしに応え得る情報源として機能しているのだろうか。取りあえず手に取って、なじみの著者のなじみの記事にサラリと目を通し、「なるほど」とか「やっぱり」とか納得したり感心したりして書棚の隅に追いやる。そんな読まれ方に止まって、改めてページを繰ることもない雑誌であるとしたら、電子情報としての蓄積にどんな意味があるのだろうか。

『婦人と子ども』
創刊号表紙
（第1巻第1号）
1901年（明治34年）
・表紙絵：荒木十畝
・題字：高嶺秀夫

電子化・ネット化に際して、改めて問われねばならないのは、編集方針とそれによって収集される記事の実態ではないか。本誌が提供しているのは、研究者、実践者、あるいは保育に関心のある一般の人々に対して、一過性の読みではなく、繰り返し読み返し、自身の研究なり思索なりに活用したいと考えるような、質の高い情報であり得るのか、否か。

私は、いま、編集業務に携わる当事者たちに対して、その労をねぎらうのにやぶさかではない。したがって、そんな方たちに対して、いささかならず脅迫めいたこんな言辞を突き付けるのは、必ずしも本意ではない。有力情報の廃刊の報を耳にするたびに、『幼児の教育』は「よく頑張っている」と、ひそかに声援を送っているのは確かなのだから。

しかし、印刷情報を電子化・ネット化するというメディアの流通革命の波に乗って、本誌もまた、新しい情報流通の運命を共にしようと意志するからには、いま一度、この問いを改めて問い直すべきではないだろうか。本誌は、「何を目的とし」「誰に向かって」「どんな情報を提供しよう」としているのだろうか、と……。

創刊の当初は、保育を考える人たち、あるいはそれに携わる人たちに「思索と実践の材料」を提供し、学ぶに値する「よき実践モデル」と「最新の海外情報や研究成果」を紹介する、唯一かけがえのない雑誌であった。時代が下って、関係者の視野に偉大なカリスマ的指導者として倉橋惣三が浮かび上がったとき、本誌は、紙面ながら尊敬する導師の謦咳に接し得る数少ない媒体として、多くの購読者に支えられた。

また、第二次大戦後の一時期、まっとうな「学会誌」が不在であったその時期に、本誌は、学会誌に代わって保育に関する研究論文を掲載し、それを流通させる役割を担ったこともある。『幼児の教育』

は学術情報を掲載した専門誌か、それとも一般に対する保育啓蒙誌かという問いに対して、その双方に奉仕する「セミプロフェッショナル誌」だというのが当時の編集方針であった。過去の掲載文に触れたいという大方の要望に応えて、復刻版が構想され、その実現を見たのもこの動きの一端であった。

いま、学会誌も年二回の刊行を見、また、啓蒙的情報は各種一般誌を通じて、あるいは電子情報として、地上にあふれかえる時代が訪れている。こんな時代に、最古の伝統を誇る本誌は、何を目指し、誰をターゲットとして、どのような言挙げをすべきなのだろうか。

『幼児の教育』
誌名変更号表紙
（第23巻第７号）
1923年(大正12年)

◇　　◇　　◇

私は、現在、本誌の電子化・ネット化が、どのような方針で行われるかについては詳らかではない。現在までに誌面を飾ったすべての情報が、電子情報として蓄積されていくのか、あるいは、何らかの基準で選別が行われるのだろうか。もし、仮に、「研究色の濃いもの」とか「実践家に資するもの」とかいうような選別が行われるとするなら、それは、本誌の現在の性格の自己規定となり、また、今後の編集方針を規定せざるを得ないだろう。

なぜなら、それら電子情報がネットを通じて広く流通するなら、受容者はそれら電子情報を通じて本誌とかかわることになるからであり、その活用によって、彼ら自身が本誌の性格を規定していくから

である。加えて、その情報流通の動態が把握可能であるとすれば、それは、本誌の編集方針に影響せざるを得ないはずである。そして、受容者の活用状況が検索回数などの形で把握し得るとすれば、それは、受容者参加型の編集方針を打ち立てる契機となり得るのではないか。とすれば、それは、従来の雑誌編集に対して一つの革命であり、新しい時代の訪れを告げるものと言えるかもしれない。

ただし、電子化された情報の活用は、印刷誌の活用度の減少と相関せざるを得まい。仮に、電子情報だけが活発に活用されるとすれば、それは、印刷情報の終焉を意味するかもしれず、受容者が、ウェブマガジン的なものの登場を待ち望んでいることの証かもしれないのだから。極言謗(そし)りを恐れずに言えば、それは、近世以来、優位に立ち続けた印刷媒体が幕を下ろす時期を迎えた証とも見なし得るからである。

◇　◇　◇

ところで、ここで、従来にまして焦点化されるのは、「受容者」、より正確には保育関係の「情報の利用者」と言うべきかも知れないが、検索と活用に関する彼らの意識であり態度であろう。たとえば、それは、「先行研究への目配り」の問題として、あるいは、「他者の知的財産への認識」の問題として浮かび上がってくるに相違ない。

保育研究に関して、しばしば指摘されるのは「先行研究の軽視」あるいは「それへの無知・無関心」である。たとえば、いま、自身が取り組もうとするこの課題が、すでにほかの誰かによって先に提起されたものであるか否か、あるいは、それに対して、すでに有意な見解が表明されているのか否か、など、厳密な検証を経ることなく、いま、自身の目に映じたその課題を、自身の発見による問題あるいは

理論として検討し展開させて公表を急ぐ。こんなナイーブな態度は、「他者の知的財産の侵害」として許されざるものなのだが、従来、斯界の研究者たちはこのことにとかく無頓着であった。このことを、電子情報化を契機として関係者たちが自覚し得るとすれば、それは、保育界にもたらされる一つの進歩と言い得よう。

しかし、同時に、すでに他者によって提示された先行理論や見解が、検索の容易なネット上に浮上してくる電子情報であることによって、それがより軽く扱われてしまう危険性もあるのではないか。すなわち、従来のように図書館に通って図書を捜しだし、引用箇所を確かめるという面倒な手続きが省かれ、ネット上に呼び出される情報として簡便に入手可能であることで、それらが他者によって生み出された貴重な「知的財産」であるという認識が薄れてしまう可能性もあるからである。そして、ここで自身の見いだしたことと他者の見解との間に無邪気な混交が起こるとすれば、それは、悪意はないとはいえ、「他者の知的財産の無遠慮な乱用」、よりきつい言い方をすれば「悪意なき盗作」とすら言い得る事態を多発させ兼ねないのである。それは、言うまでもなく、保育研究の分野に、現在以上のモラル低下を招くこととして危惧の念を抱かざるを得ない。

電子化・ネット化によって、多種多様な研究情報とネット上の遭遇が容易になったとき、問われねばならないのは、先行する論稿の蓄積の前に、参照者たちが慎み深く謙虚に対することであり、先行者の知恵を借用することへのたしなみある態度ではないか。こう考えるなら、電子情報化に伴って必要とされるものの一つが、保育界において、従来、とかく無造作であり過ぎた「研究者としてのモラル」の確立であると思われる。（お茶の水女子大学名誉教授・子ども学研究者・本誌元編集主幹）

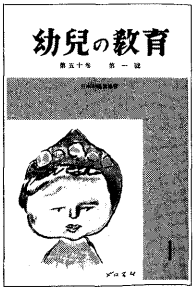
掘りやすくなった「宝の山」

豊田一秀

『幼児の教育』誌と復刻版

『幼児の教育』誌が、幼児教育の世界にいる者にとって「宝の山」である事実は、いまさら言うまでもないことです。明治三十四年に『婦人と子ども』という誌名で発刊された本誌は、今日に至るまでの日本の幼児教育の歴史そのものと言っても過言ではないでしょう。たとえば、日本における幼稚園設立の経緯、当時の保育の様子や保育内容、教材全般について、F・フレーベルの教育主張がどのように受け入れられ、どのように咀嚼（そしゃく）されていったのか、また、日本全国への幼児教育の普及の様子など、戦前の本誌をめくれば生きた証としての文献があふれています。さらに、今日、不朽の名作とされる数々の著作も最初は本誌に掲載されたものが多いのです。ご承知の方も多いとは思いますが、たとえば『育ての心』（倉橋惣三文庫③（上）・④（下）フレーベル館）をはじめとする倉橋惣三の主要な著書も、最初は本誌に掲載されたものです。しかし、この月刊誌は、その歴史があまりに長いため全巻を完全な形で所蔵している施設はないと聞いています。

そのために、昭和五十四年から五十六年にかけて



『幼児の教育』（第50巻第1号）1951年 創刊50周年号

『幼児の教育』誌の復刻版が三期に分けて、名著刊行会より出版されました。これは明治三十四年の創刊号から昭和二十八年度発刊のものまで五十二年間分を復刻したもので、この偉業によって本誌は多くの人々、特に保育研究者にさまざまな情報を提供できるようになったのです。この復刻版の優れたところは、各号の表紙やカット、掲載された広告なども忠実に再現しているところです。このことにより、本の装丁史、保育教材の歴史、保育関係の出版物の歴史など、多方面の研究の基礎資料として利用することが可能となりました。また、この全集の最後、第五十二巻の後ろ部分と別冊には津守眞氏の「解題」をはじめ、年表や総目次などが載せられ、本誌を俯瞰（ふかん）する際の大きな助けとなっています。

『幼児の教育』誌の電子化の意義

このように、日本の保育のみならず、明治中期以降の「日本」そのものを学ぶために大きな役割を担ってきた復刻版ですが、幾つかの限界もみられます。第一点は、出版数が三千部（第一期刊行分）であるために、どこの地域、学校にあってもすぐに手に取れるほど身近ではないということです（もちろん、このような出版物としては出版数が決して少ない方ではありません）。第二点は、復刻版が、創刊（明治三十四年）から昭和二十八年度までの五十二年間の間のものしかカバーされておらず、その後、今日まで既に五十五年という月日が経過してしまったということです。昭和二十八年以降の本誌はそれ以前のものに比較して多く残っているようには思いますが、それでもこの五十五年間分の雑誌を一堂に目にするのは簡単ではないでしょう。

そのような問題が生じている中、今回、『幼児の教育』誌が発刊以来すべての号を電子化すると聞き、何と素晴らしい企画かと思わず快哉を叫んだ次

第です。この企画の完成にはもう少し時間がかかるというものの、電子化によって、復刻版の最後である昭和二十八年と今日がつながったばかりでなく、創刊号と今日がつながったと言っても過言ではないでしょう。さらに、利便性の面でも、誰もが図書館に赴くことなしにすべての雑誌を閲覧することが可能になったのです。

利便性の一例として、今日では保育界の重鎮である津守眞氏の本誌への執筆を調べようとした場合、復刻版によって昭和二十五年六月号よりであることがわかります。しかしそれ以降、すなわち昭和二十八年以降の著作は発刊済みの本誌を探すほかなかったのです。今回の電子化によって著作の検索が著しく容易になるはずです。

また、本誌に連載された文章（論文）が後に単行本として出版された例として、戦前の『育ての心』を挙げましたが、このような例はほかにも枚挙にいとまがありません。たとえば、前述の津守眞氏の『保育者の地平』（ミネルヴァ書房 一九九七）、本田和子氏の『子ども一〇〇年のエポック』（フレーベル館 二〇〇〇）、海老沢敏氏の『むすんでひらいて考 ルソーの夢』（岩波書店 一九八六）、守永英子氏の『保育の中の小さなこと大切なこと』（フレーベル館 二〇〇一）なども初出は本誌であり、単行本には見られない著者の筆致を本誌の中に見いだそうとするとき、この電子化は大きな力を発揮すると考えます。

『幼児の教育』誌と私

私事になりますが、私は昭和五十二年にお茶の水女子大学附属幼稚園に採用されました。思い返すまでもなく、私は保育に対して駆け出しの青二才でした。その未熟な私が、附属幼稚園の一員として『幼児の教育』の編集会議に参加するよう言われたのです。会議のメンバーは津守氏、本田氏、編者の皆川

恵美子氏でした。私は、最初の席で驚くような質問を受けました。津守氏より、この雑誌の感想と課題、今後の方向性について意見を求められたのです。質問にどのように答えたかは記憶に定かではありませんが、私の心に強く残った印象は、この未熟な自分を対等な者として扱おうとする、その姿勢でした。その後、たびたび編集会議に参加しましたが、経験の浅い者にも対等に接しようとする編集会議の姿勢に変わることはありませんでした。

この印象を基に、「対等」という言葉をキーワードとして『幼児の教育』誌を読み直すと、この雑誌の変わらぬ本質の一面を見ることができるように私は思います。それは、研究者と実践者の対等、幼稚園と家庭の対等、社会と母親の対等、そして、何よりも、子どもを人として対等な存在として尊重する姿勢です。

「研究者と実践者の対等」に関してですが、本誌の長い歴史の中で、保育実践報告の部分は常に大切にされてきました。時代を追ってこれらの実践記録を読み進んでみると、大変に興味深い事実に気づきます。実践記録の一つ一つは事例であり、「理論」として長く世に残りにくいモノですが、時代の流れの中でとらえ直すと、その時代の幼児観、保育観というものが反映されていることに気づくのです。そして、その時どきの筆者が、その時代、時代に真剣に子どもに向き合った息遣いに私は感動を覚えます。

昭和二十六年一月号の、創刊五十周年記念の文章で、倉橋は「本誌の心にあるものは、回顧よりも展望である……」と熱く語っています。現実に目を向ければ、現代は子どもが子どもらしく生きにくい時代のように思います。この「宝の山」を掘り進むことによって将来へのより良い展望が開かれることを切に望む私です。

（玉川大学　教育学部／元幼稚園教諭・元園長）

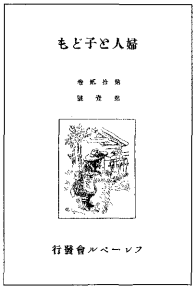
〈啓蒙誌〉の時代とその使命

首藤美香子

「育児主体」としての母親の育成

東京女子師範学校附属幼稚園が開設されて二十五年後の一九〇一年に創刊された『婦人と子ども』は、〈発刊の辞〉のとおり、「児童教育法の研究」、「母としての婦人教育の普及」、「家庭への読書材料の供給」を目的としていた。一九二三年に『幼児の教育』へと誌名が変更されたが、出発点より、「保育研究者・実践家」と「家庭の母親」の二対象への「啓蒙誌」としての役割を担ってきた。

特に、『婦人と子ども』の時代は、創刊号が日本画家荒木十畝の表紙絵と高嶺秀夫の題字で格調高く飾られたように、近代国家建設を支える知性と品格ある女性の育成に主眼が置かれた。〈家庭論〉、〈育児学入門〉、〈子守相談〉、〈賢母賢夫人の伝記〉、そして〈料理・裁縫・礼節作法・和歌俳句・読書〉に関する記事などは、新時代にふさわしい人間形成の指針を明示し、豊かで文化的な生活を志向する女性の自意識をくすぐり、愛情と教養にあふれる近代の理想の母親像を提示してきた。つまり、『幼児の教育』は、「育児主体」としての母親を育成しようと



『婦人と子ども』
（第12巻第1号）1912年
倉橋惣三が編集主幹となる。

する啓蒙誌の一つの典型であったといえよう。

学術知による幼児教育実験の拠点構築

一方同誌は、当初より、新教育主義者が幼稚園という新しい制度の意義を社会に訴えるための媒体とされ、学術知による教育実験を試行する専門家集団の拠点ともなった。また誌上では、〈家庭と幼稚園の関係〉、〈小学校教育と幼児教育との相違〉、〈教育としての遊戯の可能性〉、〈課業指導の是非〉、〈子どもの発達と教育の質の評価〉、〈子育ての社会化と幼保一元化〉などをめぐり、今日もなお模索が続く課題についての極めて質の高い議論が展開されている。

『幼児の教育』は、近代日本の幼児教育のたどった試行錯誤の軌跡を確認でき今日への教訓とすることができる、第一級の資料的価値をもつものとなっている。

カリスマ指導者の登場と教員養成

倉橋惣三が編集主幹となるのは、一九一二年の第十二巻からである。「幼稚園保育及設備規程」の制定（一八九九）、「小学校令施行規則」の制定（一九〇〇）、そして「幼稚園令」公布（一九二五）と制度整備が進み、幼稚園数は一九一六年の六六五から十年後には倍近い一〇六六にまで増加する。幼稚園が認知され始め、確かな教員養成が求められる中、女性中心の幼児教育界を牽引するカリスマ男性指導者として、倉橋が登場する。たとえば第十二巻から始まる「森の幼稚園」は、倉橋が幼児教育にかける夢を語った情趣あふれる美文だが、みずみずしく輝く生まれたての朝露のような倉橋の至言を読者は毎月どれほど心待ちにしたことだろう。多いときには百六十ページ以上の厚さになった一九三〇年代には、〈倉橋の保育論〉のほか、〈海外視察記録〉や〈地方の実態報

告〉、〈研究論文〉、〈各種調査結果〉、〈保育案の実際解説〉、〈保育内容の事例〉などが満載で、全国の幼稚園教員のための学習教材として活用されたと思われる。

時代の変化と直接対峙する本質論の探究

戦後、同誌は幼児教育専門誌として、研究者と実践家が教育の本質論を戦わせ、時代の変化と真正面から向き合う真摯な姿勢が貫かれている。たとえば、「幼稚園教育振興計画」の発表と「幼稚園と保育所の関係について」の通達（一九六三）が出され、翌年の、「幼稚園教育要領」改訂告示を控えた第六十三巻では、新要領に対する識者の批判的見解や六領域（健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画制作）の実際の指導上における留意点が掲載されている。表紙には「幼児を交通事故から守りましょう」という標語が載るなど、高度経済成長を遂げ東京オリンピック開催に至る過程での子どもを取り巻く生活の激変に対して、「子どものより良い育ちをどう保障していくか」読者の心に直接具体的に響き、問題意識を喚起できるような明解な主張が発信されていたといえる。

学際的子ども論の開花と啓蒙役割の終焉

ところで、一九八〇年代の「知のパラダイムの転換」と、「女性を取り巻く社会状況・産育意識の変化および女性学の台頭」は、啓蒙誌としての『幼児の教育』に方向転換を迫るものだったといえよう。「未成熟で発達途上ゆえに教育と保護を必要とする子ども観」を前提とする幼児教育研究に対する自己批判は、従来の教育・発達心理・小児医学・児童福祉の枠組みを超えた子どもへのアプローチにより子どもの生を相対的にとらえ直す必要性を促し、誌面には学際的な子ども論が開花した。たとえば、森洋子のブリューゲルの子どもの遊戯論や鬼頭宏の近世

の歴史人口学論などは、子どもの遊びや子どもの生死の意味について時空を超えて考える機会をもたらすものだった。

さて、この時期に、「性別役割規範」や「母性神話」への問題提起がされた結果、育児や教育の専門家の助言指導により女性を啓蒙する雑誌の使命が揺るがされた。実際、一九八〇年代後半より、一般の育児雑誌は読者参加型の誌面構成で部数を伸ばしたが、それは子育てに対する母親の不安や負担感を軽減することに重点を置いたもので、読者のニーズを先取りした実用的な情報と子育ての効率効果を優先するマニュアルに終始するものだった。その傾向は、残念ながら今や、教員養成の教材や現職者向けの指導書の一部にまで浸透してきている。

記録・内省による現場実践の質的向上の模索

そうした時代の安易な嗜好（しこう）と対抗するように、近年『幼児の教育』は保育の本質を探究する内省的な実践家たちの貴重な自己研鑽の場になってきている。学問の専門分化が進み、教養が廃れ、市場原理の下で「知」が「情報」として消費され、啓蒙すべき対象もその確かな目的も喪失した今日、『幼児の教育』のような「啓蒙誌」の存在意義は認められにくいだろう。そんな厳しい状況において、優れた実践報告から実践家の今日の葛藤と改善への努力が率直に語られることは、質の高い明日の幼児教育の実現に必ずや寄与するものと確信する。

このように一世紀の間、常に時代の課題と真摯に向き合ってきた『幼児の教育』が、記事の電子情報化を機に孤高から解放され、同誌の精神を継承する共闘者と連携して「知」の新しい共同体を構築できるのか、歴史研究の活性化とあわせて、今後の展開に期待したい。

（子ども観の社会史・児童文化論・比較幼児教育学）

歴史研究の想像力
― 資料のWEB公開に際して ―

加島大輔

この『幼児の教育』誌が、WEB上で公開され始め、私たちはインターネットに接続する環境さえあれば、いつでも目にすることができるようになっています。今回初めて知って驚いたのですが、本誌はすでに百年以上続く、大変長い歴史をもつ雑誌です。その間のさまざまな出版事情の変化などにもかかわらず、継続して刊行されているということは、幼児教育の世界にとってはもちろん、歴史的にも意味をもつものと思います。ここでは、歴史的な資料（以下史料と総称します）がWEB上で公開され、手に入れることができることがどういう意味をもつのか、常に史料を扱っている歴史研究の立場から考えてみたいと思います。

とはいえ、私は歴史研究の世界に足を踏み入れて間もない、いわば駆け出し者です。それでも、近年の歴史的な資料をめぐる状況が、非常な速さで変化していることを実感します。たとえば、史料の撮影方法も、以前は重いマイクロ撮影機を使って、マイクロフィルムに撮影していました。もちろん、現像してみるまで撮影結果はわかりません。うまく撮影

『幼児の教育』
（第54巻第1号）1946年
戦後第1号

できず、撮り直しをする場合もあったと聞きます。しかし、現在はデジタルカメラが高性能化しており、史料撮影にかかる手間は大幅に減りました。

そして近年、史料自体について、少しずつではありますが、WEB上での公開が進んでいるという状況もあります。挙げてみますと、国立公文書館がアジア歴史資料センターという電子資料センターを運営し、国の政策にかかわる史料をWEB上で公開しています。また、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーは、明治期の図書を中心に著作権保護期間が満了したものを中心に公開しており、徐々に公開範囲は大正期に広がりつつあります。このように私たちが史料を入手する方法は、以前とは大きく変わってきているのが現在の状況といえるでしょう。

『幼児の教育』誌のWEB上での公開は、創刊号からすべて、しかも著作権保護期間の満了を待たずに行われる点、また、記事内容についての検索機能が備わっているということが特徴だと思われます。これらのことは、歴史研究にとっては次のような意味をもつのではないかと考えます。一つは、WEB上で公開される史料についてはそうなのですが、史料を探索に出かける必要がない、ということです。どのような史料がどこに残されているのかということは、歴史研究者にとっては身に付けておくべき知識の一つであり、自分の関心にかなう史料は文字どおり「足で探す」ことが求められます。したがって、国内はもとより、研究関心によっては海外まで出かけることも珍しくありません。WEB上での公開が、その労力を大幅に軽減してくれるのは間違いないでしょう。

いまさら言うまでもないことですが、史料に残された事実から、ある時代の状況を構造化してみせる歴史研究にとって、史料は最も重要な素材です。この重要であるという意味には、単に史料に書かれて

いなければ、それを事実として扱うことができないということのほかに、次のような意味もあるといえます。それは、史料が、自分がそれまで歴史の常識と思っていたことをくつがえすような場合もあるということです。

たとえば、「この時期にはある制度が完成されて機能していたはずなのに、それを別の方向に変えようとしていた。しかし、それが頓挫したために、今は知られていない」といったように、自分の仮説に沿って、それに合う史料だけをつなぎ合わせていたのでは、そうした史料は見落としていたかもしれません。可能な限りすべての史料を見ることで、全く忘れ去られた事実が、自分の常識を超えて現れる場合もあるのだといえます。したがって、『幼児の教育』誌が今回、ある一部分だけではなくほぼすべて公開されることは、史料としての価値を高める点において、大きな意義をもつと思われます。

また、図書館の蔵書検索など、ＷＥＢ上での史料公開に限ったことではありませんが、自分の必要なキーワードで検索が行えることは、利用者にとっては大変便利なものといえます。目録上、あるいは目次から一つ一つ探す手間、あるいは見落としという事態を避ける検索機能が、『幼児の教育』誌の公開においても使えることは、ありがたいことです。

さまざまな便宜が供されるＷＥＢ上での史料の入手ですが、その一方で気をつけねばならないことも考えられます。それは、歴史研究者にとっては自明であり、かつ重要なことなのですが、平面上に検索によって現れた史料が、どのような意味をもっているのかについての想像力をこれまで以上に働かせる必要があるということです。すなわち、たとえば政策にかかわる史料は、いつ、どの部署が書いたものかなどの条件によって、系統的に整理されています。したがって、なぜそこにその史料があるのかに

は一定の必然性があり、私たちはその時期の史料全体から、当時の状況を構造化できるといえます。また雑誌についてはたとえば、書架に並んだものを順番に繰っていく中では、その掲載号の前後にもある程度目を通すのが普通かもしれません。一方、検索機能を使用して、ある人物が書いた記事を集めた場合、それらの記事がどのような時代状況の中で書かれたのかなど、吟味が必要だということです。また、特に雑誌記事の掲載には、編集者の意図が反映されたと考えられますから、検索に現れたものだけで、当時の状況をすべて説明できると考えてはならないわけです。

このように、WEB上で史料を入手できることには、歴史研究を行う者にとっても多くの便宜があり、そのご労苦には敬意を表さずにはいられません。そのうえで、「何の疑いもなく、大学に属している学者が一番史料を集め、それらを読んでいると考えるのは思い上がりもはなはだしい」と述べられた研究者もおられますが、一般の方々も含めて便利になるとはいえ、研究者としての専門性が減じられるということでは決してなく、むしろより注意を払うべきこともあるだろうことは、ここで述べたとおりです。

史料自体も、また最近は書かれた論文もWEB公開が進んでいることもあり、多くの人の目にさらされるという点では、歴史研究者だけが史料を読み解いているわけではないことを自戒しつつ、しかし、大いに史料として活用したいと考えています。

（東京大学　大学院　教育学研究科博士課程）

参考文献

原武史『昭和天皇』岩波新書二〇〇八年
土方苑子「都市教育史試論」藤田英典ほか編『教育学年報六 教育史像の再構築』世織書房一九九七年

多くの母親・保育者のために

― 大和郷幼稚園座談会 ―

向山陽子

M　本日は、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。このたび、『幼児の教育』誌編集部から、読者である本園のお母様方、教諭の皆様に、本誌にまつわるエピソードなどをお聞きしてほしいとの依頼がありました。また、本誌バックナンバーを「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション〝TeaPot〟」上でインターネット公開することになったとのことで、この件に関しても皆様の思い、今後への期待などをお聞かせ願いたいとのことです。どうぞよろしくお願いいたします。

O　私は、もう二十数年前になりますが、この園で幼稚園教諭として子どもたちとの毎日を始めたころ、影響を受けたいと思える先輩たちが読んでいらして、私も読み始めました。職場を離れ、子育て中も読みました。子どもの幼稚園の先生方も愛読者で、コピーして、幼稚園のママ仲間と読み合ったりもしました。

K　私はここ数年の読者です。やはりこの園に勤めてから読み始めました。最近では、戸田雅美先生の「子どもと保育の情景」を一番に読みます。また、

「保育の現場から」の文章にもどうしても飛びついてしまいます。それから、存じ上げている大学教授の方々の若かりし保育者時代の姿などが描かれていたりすると夢中で読んでしまいます。

H　私は、この園に息子がお世話になっています。M園長先生からのお薦めの本だというので読み始めました。はじめは、正直に言いますと、あまり期待していませんでした。でも、読み始めてびっくり。六十四頁しかないのに、中味はぎっしりで、とても読み応えがあります。今はこれで五百五十円は〝お得〟が実感です。ただ、年に一回しか園長先生が宣伝なさらないので、ぐっと来る文章を読んだ後にはもっと宣伝なされればいいのにと思います。先ほど、O先生がお子さんの幼稚園でコピーして読み合ったというお話を伺って、園長先生が、〝子育て何でもtalk〟（園長と保護者との井戸端会議）でコピーして下さるのを待っているだけだったなとちょっと反省しています。

『幼児の教育』
（第105巻第11号）2006年
特集：日本の幼稚園教育
百三十周年を迎えて

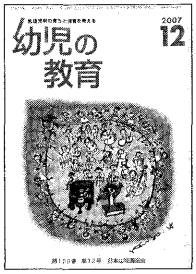
Y　私は、娘が園にお世話になっています。実は、結婚前は幼稚園で保育者でした。恥ずかしながら、『幼児の教育』誌はこの園で知りました。大学時代に、お茶の水女子大出身の教授に教わっていましたが、大学時代も勤務園でも残念なことに知りませんでした。M園長先生からのお薦めがあり、幼稚園を通して購読していますが、書店を通じて購入も可能なのですよね。わが家では夫も読みます。企業で働いていますが、おもしろいようですよ。最近の「特集・生活を保育へ」は、夫婦の話題にのぼり、子育てに関して夫とちょっと深い話をするきっかけになっています。

M　ご夫婦でどんな話をされるのですか？

Y　あれは確か、おむつを外す話でした。ちょうど下の子がおむつを外す時期で、お姉ちゃんのときは何も考えずに育児書を読んでイライラしながら、でもそれほどの苦労もなく取れたのですが、下の子は……。子どもが二人になって幼稚園もあるし（笑）。

そんなとき夫から、「あれ読んだ？」って話しかけられたんです。「おむつを外すって子どもからしてみれば、なんて考えたこともなかったよ」って。私からしてみれば、〝夫が私と息子のおむつ外しに関心があったなんて！〟って感じなんですが、うれしかったです。その夜は子どもを寝かしつけてからおむつ話に花が咲きました。

O　私も、『幼児の教育』誌で、目からうろこの体験を何度もしました。今でも、印象深く覚えているのは、アレルギーのあるお子さんをおもちの方の文章です。私の息子もアレルギーがあり、除去食や掃除に、下着の素材にと躍起になっていました。母親がするべきこと！　と、自分も周りも〝べきこと〟にしばられていたときに、「この子と私がこういう生活をしていることの意味」「今、この子と私がこうしていることが、この子と私の将来に向けて培っていること」のようなことが書かれていて、ハッとしました。あのときから、子育て全般に焦ることなく気持ちがゆったりできるようになったかなと思います。そういう意味では、私にとって三人の子育て中も『幼児の教育』誌はありがたい存在でした。



『幼児の教育』
（第106巻第12号）2007年
特集：生活を保育へ
表紙絵：林　建造

今はまた現場で、お母様方や若い保育者の方たちと保育する中で、『幼児の教育』誌を熟読する日々

です。本誌の、子どもの側からの視点に徹した姿勢に学ぶことが多くエールを送ります。執筆者の多くの方の文章が、読み手に優しく、寄り添っていてくれるようで、子育て・保育に力がわきます。

K　ハンディーで、通勤の途中でもすぐに取り出せて読めるのがいいです。出勤の車内で読み、その日の保育する姿勢が変わったこともありました。影響を受ける小論に出合うことが多いので、これからも読んでいきたいと思います。この園でも、今半分以上の先生が購読しています。

ネット化されることでより多くの人が読みたい小論を読めるようになることはよいことだと思います。しかし、アクセスしないと始まらないわけで、執筆者・内容・時代などからもアクセスできると、ネット化した意味が出てくるのでしょうか。

H　ネット化されて、定期購読数が減ってしまう心配はありませんか？　私はまだ本は手に持って読む派なんです。線を引いたり折ったり、寝転がって読んだり（笑）。先日、園長先生の背後に並んでいる金文字の背表紙の本がこの『幼児の教育』の復刻版で、一〇七年続いている由緒ある月刊保育雑誌だと知りました。日本の保育誌としてさらに百年後まで続いてほしいと思います。

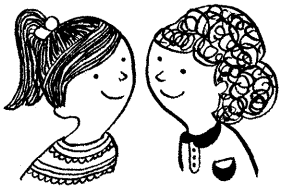
M　四十年近い昔に、お茶の水女子大学附属幼稚園に『幼児の教育』誌の編集部があり、恩師と編集員の方がお話しされているのを見聞きしたのが本誌との出合いでした。拙文を載せてもいただきました。二十数年前には編集する機会も与えられ、扉題字を津守眞先生に書いていただきました。定期購読数の悩みはそのころからありました。今日、先生たちだけでなく、お母さんたちからのお声を聞くことができ、大変うれしく思いました。今日はありがとうございました。

（大和郷幼稚園　園長）

子どもが友達と出会って自分づくりをしていく過程

― N子とY子の育ち合いを通して ―

山田陽子



JASRAC　出　0806128-801

はじめに

子どもは集団の場で友達や保育者と出会い、関係を紡ぐ中で「かけがえのない自分」づくりをしています。このことを、私はN子とY子に学びました。

二人は知的に障碍のある子どものための愛育特別支援学校の小学部で出会い、入学から卒業までの六年間を同じクラスで過ごしました。クラスメイトは入学時は五名で卒業時には八名になりましたが、女児はこの二人だけでした。私はほかの保育者と共に六年間担任しました。二人はかかわりの中で、互いに影響を及ぼし合いながら、それぞれの成長を豊かなものにしていきました。

ここでは、その中身について紹介したいと思います。

それぞれが自分の世界を広げる

Y子は小学部から入学し、初めて集団生活を体験することになりました。当初は登校すると、まずは近くの公園を母親と散歩しました。心の準備をしているのだと思いました。校内では母親に負ぶわれたり抱かれたりして、クラスルームの隣のホールで過ごしました。手には必ず兄の参考書や姉の財布などを持ち、家族とのつながりを心の支えにしていました。私もY子と母親のように、体の触れ合いを通してつながろうとすると、Y子は緊張した笑顔で「私の中に踏み込んでこないで」と断ってきました。Y子は私と触れ合うことで、私に自分の存在をのみ込まれてしまいそうな不安を抱いたのだと思います。Y子の笑顔からは「あなたの存在を拒否しているわけではない」という優しさが伝わってきました。その一方でY子は、ほかの子どもが保育者に抱かれたり負ぶわれたりしている姿を見かけると引き寄せられるようにしてそばに行き、その子どもが一人で動き出すと母親の所へ戻るのでした。

N子は幼稚部から在籍していました。この時期のN子は親しい保育者に「上下（うえした）行くの」と要求を出し、抱っこされて階段を上がって二階へ行き、静かな空間で過ごした後「今度は下へ行く」と言って、一階に戻ることを日課にしていました。子ども集団の中で生活することに緊張があったのだと思います。また親しい保育者が自分の期待に繰り返し応えてくれる体験を積み重ねて、保育者との信頼関係をより確かなものにしようとしていました。N子はこの活動の際に、必ず童謡の『うみ』を保育者と一緒にうたいました。歌詞の中の「いってみたいなよそのくに」の「いって」というのを強調していました。保育者

との信頼関係を基盤にして、自分の世界を広げるタイミングを計っているように感じられました。

Y子はN子の階段の上り下りが始まると、N子の服をしっかり片手で握り、もう片方で家族の持ち物を握って同行していました。Y子は保育者をしっかり心のよりどころにしているN子と自分を同一視する形で母親以外の大人を心のよりどころにしながら、愛育という新たな場所を自分の世界に組み入れようとしているようでした。

それぞれの好きなことを自分で広げる

Y子はN子がハモニカを吹くとすっともらって吹き始めます。N子がトランポリンに乗れば、自分も乗ります。N子がやることは、自分にとって初めてのことでも迷わず同じようにやりたがります。昼食の際、Y子はN子のお弁当から自分の好きなおかずをすっともらって食べようとします。私が待ったをかけると、N子は気前よく自分のおかずをY子のお弁当箱に入れてあげます。お返しに、Y子は自分のおかずをN子のお弁当に入れようとします。するとN子は泣きだし、自分の髪を引っぱったり手を床に打ち付けたりするのでした。N子は自分から差し出すのはよいのですが、受け取ることに抵抗がありました。私はそのことを気遣っていましたが、Y子はありのままにN子に働きかけていました。

N子は友達とのかかわりを求めているものの、相手から予測のつかないかかわりを受けると不安になり、反射的に相手の髪を引っぱってしまうことがありました。Y子は自分との間にそういうことがあっても、変わらずN子の心のそばにいようとしました。N子にとってY子は不安の種でもありながら、うれしい存在でした。

そんなある日、N子は「Nちゃんもやってみ

る」と言って、自分がやることを表明したうえで、魅力的だと思えるY子も含めたほかの子どもの遊びをまねるようになりました。中にはこれまでN子が避けていたような遊びも含まれていました。N子のまねる行為は受け取ることであり、自分自身の殻を破ることでした。

自分の思いを相手に表明するやり方を学び合う

二人は自分の思いを相手に表明するときのやり方が異なります。たとえば、私がある時期から、さまざまな事情でゆっくり登校した子どもに「待っていたわよ」と声をかけるようになりました。あなたが登校するのを私は楽しみに待っていたこと、愛育と出会った現在からここでの生活が始まるのであって、すでに始まっているほかの子どもの生活に気後れする必要はないことを伝えようとしました。私と彼らとのやりとりを見ていた二人は早速、N子は「まってた」（先生、私のこと待っててくれたよね？）、Y子は「いたあ」（いたあ。先生が私のこと待っててくれた！）とあいさつするようになりました。また、ピアノで弾いてほしい歌を要求するとき、N子は「今度は何がいい？」と自分の方から私に問いかけるような形で持ちかけ、私が改めて「今度は何がいい？」と尋ねると、好きな歌を言います。Y子は「おうた」と言って要求し、自分の思いと違う歌を弾くとすぐに「（違う）おうた」と言って、率直に自分の願いを伝えてくるのでした。N子は時折、意を決してという感じで、Y子をまねて「いたあ」「おうた」ということがありました。

N子は日ごろの会話は言葉をよく活用していました。Y子は言葉以外の表現が多いのですが、自分の大好きな人の象徴である「お母さん」という

言葉で男女問わず親しい保育者に呼びかけ、「先生」「おうた」など自分にとって一番必要とする単語を獲得しては、状況に応じて表情や体での表現と合わせて多義的に活用していました。

N子が「ちょっとさみしいの」とか絵本を見ながら「新幹線乗りたいなあ」などと自分の思いを柔らかな語り口で率直に伝えるようになったころ、Y子が私に「おかあさん」と呼びかけて、「なななななななななあ」とN子のイントネーションをまねながら、会話を向けてきました。

二人が、それぞれ相手に憧れをもっていて、自分の中に取り入れようとしていることが伝わりました。

お互いに、一緒にいるのが楽しいことに気づくことで、自己を調整しようとする

N子とY子とクラスメイトのA男は三年生の時期、毎日のようにホールにあるピアノで自分たちの好きな歌を弾いてほしいと要求してきました。おもしろいのはこの内の誰かの要求に応えているとほかの二人が音を聞きつけてやってくることです。三人が集うとにぎやかで、楽しさが増しました。当初歌なら何でも好きよという感じだったY子が、N子やA男のように積極的に楽しみたいと思ったのか、自分の弾いてほしい歌を主張するようになりました。反対に、私が自分たちの好きではない歌を弾くと泣きだしていたN子と、怒って私の手を振り払っていたA男は、自分の中で折り合いをつけながら、一緒に楽しむようになりました。自分の楽しさと相手の楽しさが重なり合うことの喜びを体験した表れだと思います。

二人が四年生になったころ、N子は遊びに行ったほかのクラスで子どもたちが歌のテープを聴いていて、それが自分の好きでない歌の場合の対処

の仕方を「止めてもらう」「ほかの歌に変えてもらう」のほかに「場所を移動する」「○○ちゃんの好きな歌だということで納得して聴き続ける」「好きな遊びをしながら次の歌を待つ」というように選択肢を増やしていきました。Y子は、自分の弾いてほしい歌をはっきり主張するものの、私が応えられない状況のときに事情を話して「Yちゃん自分で弾いてて」と促すと、弾きながら待つようになりました。

このように周りの状況に応じて自己を調整していこうとする中で、二人とも、より自由になっているように見えました。

目の前にいなくても相手の存在を感じる

Y子の持ち物にN子の写真が加わりました。それは**愛育通信**（各学期の終わりにその子の生活の様子を写したスナップ写真と成長の記録を子どもと保護者に向けて作成し、配布するもの）を切り取ったものでした。私は友達を意識するのに写真が有効だと気づかされ、クラスの壁に貼って、台紙を張ることで取り外しが自由にできるようにしました。その後、Y子は登校して、まずはその日持ち歩く写真を選ぶのが日課になりました。

Y子の愛育通信は毎年ボロボロで、愛読している様子が伝わってきました。あるとき、風邪をひいて欠席したY子に電話すると、母親が「あっ、今Yちゃんが愛育通信の山田先生の顔を怒ったように見て、キスしています」と実況報告してくれました。

N子も同様で、彼女が手術のために入院した際にお見舞いに行くと、後から来た父親が「Nちゃん、君の宝物を持ってきたよ」と言って愛育通信を渡しました。N子は喜んですぐに開き、私を

誘って一緒に見ました。見終えると枕元に大事そうに置きました。二人の心の中に、愛育での友達や保育者との生活がしっかり根付いていることが伝わりました。

相手のために何かをしてあげたいと思う

五人のクラスメイトのうち、N子とY子を含めて四人が発作の薬を服用していました。私は誰かが発作を起こしてクラスのソファベッドで休んでいるときは、目覚めたときに安心してほしいという願いから、そばについていました。二人は自分たちの好きなおもちゃを持ってソファに上がり、時にはほかの子どもも加わったりして、みんなでぎゅうぎゅうになって過ごしました。

N子は体に変調を来したとき「ちょっと変」と言って、周りの保育者に伝え、しばらく休みます。ほかの子どもが発作を起こしたときも「ちょっと変」と言って、自分のことのように気にかけて、そばで見守っていました。

Y子はN子がホールで泣いたとき、隣で切なそうな表情で見つめていました。そして、クラスルームから涙を拭くものを見つけてきました。それはたまたま雑巾でした。洗濯したてだったので、N子の涙と、そんなY子の優しさがうれしくて出てしまった私の涙も一緒に拭きました。

相手の顔を見ると元気になる

四年生の三学期ころから、N子とY子は一緒に過ごす時間が少なくなっていきました。

N子は朝「待ってた」と私にあいさつした後、一人で自由に学校中を闊歩していました。出かけていった先で出会った保育者とおしゃべりした

り、一人でお気に入りの絵本を見たりトランポリンを跳んだりして、好きな活動に取り組んでいました。そして時折「さみしくなったの」とクラスに戻ってきては私の膝で休んで、また出かけていきました。

Y子が五年生になったときに、弟が生まれました。Y子は、保育者と子どもの二者の関係づくりをていねいにやっている所にいちずに入って行って、その保育者とかかわろうとしました。相手の子どもに応じて、ほかの保育者が入って四人で過ごしたり、三者関係で過ごすことに意味があると思える場合は当事者の保育者にまかせたりしました。Y子の人間関係の変化は、周りの人たちの関係にも新しい風を吹き込むことになりました。このころY子は「好き」という言葉を発するようになり、親しい保育者の顔をじっと見据えて、何度も繰り返す中で、一生懸命自分の思いを相手に伝えていました。その姿から、Y子が自分の思いにしっかり向き合っていることが伝わってきました。

こうやって二人は、それぞれの課題に向って行動を起こしていましたが、Y子はN子に会うとうれしそうで、より元気な表情になりました。N子もY子の姿を見ると安心するようでした。一緒にいなくてもつながりは消えないことを、二人は体験から学んでいました。

終わりに

N子とY子のお気に入りの歌は『友達讃歌』でした。Y子が三年生のとき初めて自分で見つけてきた歌で、そのことがうれしくて、N子をはじめ周りの保育者や保護者も一緒に繰り返しうたいました。つながり合う喜びを、二人はみんなに伝えてくれました。

（中部学院大学　子ども学部　子ども学科）

子どもを語るということ
―精神分析を手掛かりに―

秋山茂幸

教育学の特別な溝

私は教育学を学んでいる者ですが、この世界に最初に足を踏み入れたころ、「教育を研究する人は、実際に教育するにあたっても、達人なんだろうなあ」などと素朴なことを思っていました。しかし、周りを見渡すと、必ずしもそうではなさそうなのです。

教育学の世界では「大先生」と呼ばれるような方々も、ご自身は学生との接し方に悩んでいたり、自分の子どもとの関係を不器用に試行錯誤されているような、いわば「ふつうの大人」でした。次第に学問の世界に慣れて、一研究者としてどう身を立てていくかということに関心が集中していくと、「学問は学問であって、そういった個人的・主観的な事柄は

いったん棚の上に上げておく」という何とも都合のよい思考法が身に付いていきます。しかし、いかに学問的かつ客観的な語り方をしようとしても、「えらい」先生であれ誰であれ、そこには自分なりの教育哲学とでもいうべき、教育に対する一つのものの見方が隠されていたりするものです。

それは、自分自身が子ども時代にどのような教育を受けてきたかであるとか、大人になった自分自身が目の前の子どもに対してどのような教育をしているのかといったような、ある意味極めて卑近な具体的、実践的場面からつくり上げられていくものだと思います。

こういった、いわば「机上の学問」と「私自身の問題」との間に横たわる大きな溝は、近年ケアや臨床といったことが取りざたされている福祉や医療などさまざまな分野で、今まさに問われている事柄です。ただ、教育学がそれらと比べても特別なのは、それが対象としている子どもという存在が、大人の誰しもが「かつてはそれであった存在」であるという点です。教育学におけるこの特別な溝がどのようなものか考えるにあたり、まずは、ささやかな問題の整理を試みること、それがこの小文の目指すところです。

精神分析のイイカゲンさ

「子どもとはいったいどのような存在か」、「子どもとどう接したらよいのか」などといった素朴な問いを立ててみるとき、それに一般論で（いつでもどこでも誰にでも通用するものとして）答えを出すことがいかに難しい課題なのか、ということを教えてくれる知があります。それは、「精神分析」です。精神分析を生み出したジグムント・フロイトという人は、「いつでもどこでも誰が見ても子どもとはこういうものだというような理論が存在する」と考え、

実際、自分がそうだと考えるものを示しました。その中でもエディプス・コンプレックス論は有名ですし、リビドーの発達段階論は後の心理学者が子どもの発達段階を考えるにあたって基礎としているものです。フロイトは自分が打ち立てた精神分析を客観的な一般理論としての科学にほかならないと頑なに主張しましたが、それがニセモノの科学だという批判は、当時から現在に至るまで長い間続いています。精神分析は、科学としてはイイカゲンなものかもしれない。これは精神分析が生まれたときからもっている傷ですが、ここでは見方を変えて（フロイトの意思には反しますが）、このイイカゲンさこそが、実は大事なものなのではないかと考えてみたいと思います。

そもそも精神分析は、フロイトが自分自身の夢を解釈しようと試みたところから始まりました。これはいわゆる自己分析であって、その理論の最終的な根拠は、ひどく個人的かつ主観的なものです。この自分一人の問題に加えて、さらに治療という二者関係の話があります。もちろん、精神分析は心の問題を抱えた人に対してフロイトが関係をもち治療を試みるという、極めて実践的な場面から立ち上げられたものであり、理論と実践を何度も往復して手直ししていくことで練り上げられた知です。したがって、精神分析という一般理論の裏には、当のフロイトという一人の人間と名前をもった患者の存在が、常に息づいているわけです。

すなわち、精神分析は、名前をもった唯一の存在である「私」という人間のことを語ること、さらには、同じく名前をもった唯一の存在である「あなた」と「私」の関係を語ることが、ほかの人々にとってどのような意味があるのか、そういった語りを積み重ねたものは果たして知と呼べるものなのかという問題を提起しているわけです。

これは一方で、人間（ここでの課題としては子ども）に関する一般理論、すなわち、いつでもどこでも誰にでも通用する理論とはそもそも何であるのか、という問い返しにもつながります。

一人称の子ども

さて、ここでの課題である子どものことに話を戻しましょう。フロイトが自分の夢を分析して発見したもの、それは一言でいえば、フロイト自身の心の中で生きている〈子ども〉でした。夢とは願望充足であるという、フロイトのよく知られた言葉の意味とは、人が普段無意識へと追いやってしまっている願望が夢の中で形を変えて現れてくるということです。そして、無意識とは、大人が普段は抑圧していても心の奥底で息づいている自分の中の〈子ども〉の部分だといえます。この〈子ども〉は「子どもっぽさ（幼児性）」であり、「子ども時代の思い出（幼児期記憶）」であったりします。大人は常にこの〈子ども〉を抱えもって日常生活を送っているのですが、この〈子ども〉はそのままでは表には出てきません。大人は社会のルールや規範を身に付けている以上、この欲望そのままの〈子ども〉はむき出しの状態で表に出ることを許されず、常に変形を受けたり回りくどいやり方で現れてきたりするわけです。

フロイトにとって、大人になるということは、この〈子ども〉にふたをしてしまうことを意味しています。そして、ここは微妙なところですが、ふたをしたその中身の〈子ども〉は、自分が「かつてそれであったところの子どもそのもの」ではもうないともいえます。大人が自分の中に生きる子どもっぽさを見つめ返したり、子ども時代の記憶をたどるとき、〈子ども〉は常に大人のフィルターによって侵食されているのです。言い換えると、大人は自分の中の〈子ども〉と向き合うとき、その都度その都度、新たな出会い

をしていると言えます。記憶の問題としていえば、子ども時代の記憶は振り返るごとに、新たな意味を与えられ、新たな姿を現すものであるといえるでしょう。

したがって、われわれが一般に「子ども」と口にするとき、そこには、われわれ自身の中に棲む〈子ども〉と、それを口にする大人としての私自身のあり方が常に影響を与えているわけです。ここでは、このわれわれ自身の中に棲む〈子ども〉のことを「一人称の子ども」と呼んでおきたいと思います。

ちなみに、「棲む」とは、人間が主となって「住む」というのとは違い、人間ではないもの（動物や時には神々など）が自然と共生してゆく様を表すときに使われるように思います。「一人称の子ども」とは、心の奥底の自然的、動物的な世界ともいうべき場所に生きる何ものかであり、フロイトはこの自分の中にありながらも大人の「わたし」とは異なる何ものかを「エス」（ドイツ語の三人称中性代名詞）と名づけました。

子どものカウンターパートナー

当たり前な話ですが、子どもという言葉は、大人という言葉なしには存在しません。これらは二つで一つとでも言うべき対になる言葉であって、互いが互いを補い合うカウンターパートナーです。もしこの世界に子どもしかいなくなったら、子どもという言葉自体はその意味と存在を失うことでしょう。そのうえで、次のような問いを立ててみたいと思います。すなわち、フロイトの一人称の子どものカウンターパートナーは何者でしょうか。それは、まず何より大人としてのフロイト自身です。言い換えると、大人としてのフロイトが「わたし」と口にするときの、まさにその「わたし」です（精神分析でいう「自我」のことです）。

ところで、実際に時間をさかのぼると、フロイトの子ども時代、フロイトをジギスムントと名付けそう呼んでいた人がいます（フロイトは思春期を過ぎるころになると、自らの名を縮めジクムントと名乗り始めます）。それは、もちろんフロイトの親です。子どもとしてのフロイトのカウンターパートナーは、親にほかなりません。特に、フロイトにとって父ヤコブの存在は特別なものでした。

先に述べたように、精神分析はフロイトが自分の無意識を分析したところにその出発点がありますが、そのときフロイトにとって最大の問題になったのが亡き父の存在でした。幼きフロイト、ジギスムントが父ヤコブに対して、どのような感情を抱いていたのか、それを振り返り生き直すことこそが、自己分析のプロセスだったのです。それに際して、フロイトの聞き役となり父の代理役を演じたのが、フロイトの親友ヴィルヘルム・フリースです。このときフロイトは、自分の無意識の中で今もなお生きている父ヤコブと幼きジギスムントの関係を振り返りつつ、過去の感情を再体験しました。無意識の中に眠っていた「父ヤコブと子ジギスムントの関係」が、今ここにおいて「フリースとフロイトの関係」に重ね合わされたわけです。これを精神分析では「転移」と呼びます。

先に、われわれ自身の中に棲む〈子ども〉という言い方をしましたが、これはさらに正確に書き換えなければなりません。〈子ども〉には常にその対であるところの〈親〉という存在がセットで付いてまわるのであって、われわれ自身の中に棲むのは〈子どもと親の関係〉なのです。大人である「わたし」が自らの中の〈子ども〉と出会うということは、すなわち、自分の子ども時代の親と再び出会うということでもあり、そのときの関係を生き直すということを意味しています（自分の中の親とは精神分析で

いう「超自我」のことです〉。

さらにここでも治療関係の話を加えておきましょう。フロイトの自分の中の〈子どもと親の関係〉と向き合うという努力から出発した精神分析は、患者を目の前にした一対一の治療行為としては、まず何よりフロイトが患者の中の〈子どもと親の関係〉と向き合うという仕方で進みました。というのも、フロイトにとって心の病とは、今ここにいる患者の「わたし」が自分の中に棲む〈子どもと親の関係〉との出会い方に問題をもっているからこそ生じるものであったからです。転移を通じた生き直しを経ることによって、患者の中の〈子どもと親の関係〉と「わたし」の間の出会い方を新たに組み替えることこそが、精神分析の目指すものです。

話が少し入り組んできました。ここでの課題に戻り、話の要点だけ取り出しましょう。われわれが一般に「子ども」と口にするとき、そこには、われわれ自身の中に棲む〈子ども〉、それとコインの表裏の関係にある〈親〉、そして、それを口にする大人としての「わたし」自身、これらの関係性のあり方が重層的に影響を与えているということになります。

そして、この私のこと

先日、母が電話でこんなことを言うのです。

「お父さんが言ってたよ。『自分の教育は間違ってなかった。あなたが人の役に立つ仕事をしてくれていてうれしい』って」。

どうやら、ひょんなことから私の授業に関する学生の感想が、父の耳に届いたらしいのです。学生はときに教師を励ますために「授業がとても役に立った」というようなうれしいことを言ってくれます。おそらく、父はそれを聞いて文字どおりに受け取ってしまったのかもしれません。いずれにせよ予想外の形で親孝行できてしまったことに、心の中で学生

に感謝したのでした。

私の父は、幼稚園に通っていた私に小学校の算数の問題集をやらせるような教育熱心な父親で、私は当時、受験戦争と呼ばれたような過熱した競争の中でこれまで教育を受けてきました。そのせいか、教育学の道に進んだ当時、教育とは結局、大人の支配欲を満たし子どもの自主性を抑圧するものだといったような議論や、詰め込み主義の学校を批判しその不要論を説くような議論に、心のどこかで共感していました。その後、研究なるものを続ける中で、そういった個人的な事柄は相対化されてゆきますが、結局、最終的には「私自身の問題」からは逃れられないとも思います。

だとしたなら、今ここで私が教育や子どもについてどのように語るかは、私が自分の中の「一人称の子ども」とどう出会うことができるか、という問題なのかもしれません。先の父の言葉の不思議な断言調子には笑いさえ込み上げてきますが、そういったやりとりの中で、私は自分の中の「一人称の子ども」と何度も出会い直しを繰り返し、教育そして子どもについての語り方を変容させてゆくのかもしれないと思います。

付記

以上の話に加えて、フロイトが一人の親として自分の子どもと向き合ったときの問題があります。すなわち、名前をもった唯一の存在である自分の子ども、「二人称の子ども」についてです。愛娘ゾフィーの死という出来事、自らの仕事を引き継いだアンナの存在、それらとフロイト理論の影響関係など論ずべき事柄は多いですが、紙幅が尽きてしまったので別の機会があれば考察したいと思います。

（大東文化大学、慶応義塾大学、青山学院大学
非常勤講師）

子どもと保育の情景(21)

着実さとていねいさ

戸田雅美

幼稚園の三歳児の三月のこと。

保育室や園庭で遊んでいた子どもたちに、担任が、集まるように声をかけた。実は、今日は修了式の練習が行われることになっていたからだった。しかし、修了式は、五歳児と四歳児が中心で行われることとなっており、三歳児の出番はそのほんの一部でしかないので、ちょうど三歳児の出番に間に合うように集まるということで、担任は声をかけたのだった。そんな事情だったので、「すぐにまた戻ってきて遊べるから、今日は、片づけをしないで集まろう」ということになった。

築山に、砂場の道具を運んできて遊んでいた**ゆみ**と**ゆいか**は、「片づけなくていいんだよね」と言い合いながら、さっそく手を洗いに行こうとする。それを見て、近くを三輪車で通りかかった**そうじろう**が、「片づけないといけないんだよー」と二人を呼び止めると、**ゆみ**と**ゆいか**は、自信たっぷりに、「いいんだよ。だって先生が、『片づけないでお集まり』って言ったもん」と言い返す。**そうじろう**は、「えっ、そうなの?」というような表情だったが、ほかの子どもたちの様子を見て納得したらしく、自分も乗っていた三輪車をその場で降りて、走って部屋に入っていく。

三歳児たちも、「片づけないで集まる」といういつ

もとは違う形もわかって、それを伝え合って動くようになってきたのだろう。とはいえ、まだまだ三歳児。片づけをしてしまう子どもや**そうじろう**のように、「片づけをしないといけない」と伝えに行く子どもも何人かいた。

やっとほぼ全員が集まって、順番にトイレに行ったりしているときに、**あゆ**が、**けいすけ**に、「お山こわしちゃった」と繰り返し言い始める。何のことかと不思議に思って見ていると、担任には、事の次第がわかっているらしい。

「そうね、**あゆ**ちゃんは、つづきをしたかったんだよね。**けいすけ**君が、間違ってお山壊しちゃったんだよね。でもね、ほし組さんの修了式の練習に行って戻ってきたら、**けいすけ**君、ちゃんと直してくれるって言ってたよね。先生は、今日は『片づけなくっていいよ』って言ったんだけど、ほら、いつもは、集まるときに片づけるでしょう。それで、**けいすけ**君はいつもみたいに、片づけるって思っちゃったんだよね。**けいすけ**君、あとでちゃんと、**あゆ**ちゃんのお山、直すんだよね」と、**あゆ**と**けいすけ**に話しかける。それを、周りに子どもたちも聞いている。聞いているうちに、私にも、どうやら事情が飲みこめてくる。周りの子どもたちにとっても同じだったらしく、初めは心配そうに**あゆ**と**けいすけ**の様子を見ていた子どもたちも、落ち着いた表情になってくる。

三歳児たちは修了式の練習に出かけ、間もなく戻ってくる。修了式の練習に参加した三歳児たちは、ほんの少しの参加だったにもかかわらず、いつもとは違った心地よい緊張感を味わったらしい。みな一様に、少し紅潮した笑顔だった。

そして、また遊ぼうということになった。先ほど片づけないでおいた元の遊びに戻る子どももいれば、少し気分が変わったのか、別の遊びを始める子どももいた。**あゆ**は、あれほどこだわっていたのに、山のこと

は忘れたらしい。りりこに誘われるままに、三輪車に乗って園庭を走り回っていた。

しばらくすると、三輪車に乗っているあゆを、けいすけが捕まえて、三輪車から降ろそうとしている。あゆは嫌がって、けいすけの手を振りほどいて、三輪車に乗り続けるが、けいすけも、しつこくあゆを追いかけている。私は、先ほどのことを思い出し、もしかしたら山を壊したのは、あゆが好きであゆの関心を引きたかったからだろうかとも思った。

すると、担任が、嫌がっているあゆに、「ねえ、あゆちゃん、けいすけ君が、あゆちゃんに見せたいものがあるらしいよ。ちょっと行ってごらん」と声をかける。けいすけは、それを聞くとにこにこしながら、あゆを砂場に案内する。そこには、おおきな砂山ができていた。なるほど、けいすけはちゃんと約束を覚えていてあゆの山を直し、それをあゆに見せたかったのだ。

しかし今のあゆは、三輪車に夢中だったらしい。また、けいすけが、あゆとの約束を守って砂山を直したということには思いあたらないらしく、すぐにも三輪車に戻ろうとする。そこで担任は「ほら、さっき、あゆちゃんの山を直すって約束したの、けいすけ君はちゃんと覚えていて、それで戻ってきてから、ずーっと、直していたんだよ。よかったね、あゆちゃん」とけいすけの思いを伝える。やっと、あゆは思い出したらしく、砂山を見るとうれしそうに笑う。

その笑顔を見ると、けいすけは、「ね、あゆちゃん、こうやって……」と、山を手のひらでていねいにたたく。あゆがじっと見ていると、あゆの手を取って砂の上に乗せ、「ほらね、やってみて」と、もう一度手のひらで砂山をたたいて固めてみせる。あゆもつられてたたき始めると、けいすけは「楽しいねえ」とあゆの顔をのぞき込む。

あゆは、本格的に砂山で遊びたくなったらしく、山にトンネルを掘ろうとする。それを見たけいすけは、

「たたいてからにしよう。丈夫にしてからね」と、またたたいて見せる。**あゆ**も「そうだね」と言うように、**けいすけ**と同じようにまたていねいに山を固め始め、同じ動きが楽しいというように、顔を見合わせて笑う。

三歳児の世界は、ふわふわとやわらかい。悲しいと思うとどうしようもなく悲しいのだが、何かのきっかけで気持ちが変わると、その新しいことに夢中になることができる。思いがあっても、いやむしろ、思いがあればあるほど言葉にできないことも多いが、その反面、遊びを通して、同じ動きを通して、思いが通じ合う。それもまた、人と人とのコミュニケーションにとって、大切な経験である。

三歳児という子どもたちは、保育者が一つひとつ着実に援助していけば、やりたかった思いを持続することも、友達に思いを伝えることもできるかもしれない。たとえば、「**あゆ**ちゃんは、**けいすけ**君に、お山を直してもらいたいって言ったじゃないの。忘れちゃったのかな」とか、「**けいすけ**君は、せっかく**あゆ**ちゃんとの約束を守ってお山を作ったのだから、『**あゆ**ちゃん、約束守って作ったから見に来てね』ってちゃんと言おうね」と促すこともできる。

しかし、三歳児らしいやわらかさの中で、思いが相手に届いたときの喜びの体験を大切にていねいな援助する。こんな保育が基盤となって、次の四歳児の生活につながっていくのだろう。着実な援助とていねいな援助、その違いを考えていきたい。

（東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻）

保育の現場から

一学期と二学期の「あいだ」とは
― 夏休みを経て子どもたちと再び出会う ―

横井紘子

一学期は「世界」の再構成の時期

昨年度、私は保育者として一年生でした。初めての担任。初めて担任として出会った三歳の子どもたち。入学式の日から、私の予想を超えることの連続でした。どんどん出てくる「問題」（と当時の私にとらえられたもの）に、即効的で直接的な対処の「方法」を求めようとしても、保育にはそのような万能の「方法」はありませんでした。

子どもたちは、何を感じ、何を思い、何を抱え、それをどのように表現しているか……。換言すれば、一人ひとりがどのような「世界」を生きているのか、その「世界」を理解しようとする営みだけで精一杯の毎日でした。一人ひとりの子どもが生きている「世界」は、その子どもに固有のものです。「世界」のあり様は、一人ひとりそれぞれに違って

いて、表現する仕方も違います。しかし、固有の「世界」を生きているという事実は、一人ひとりに同じであり、それぞれの「世界」は別の「世界」と全く異質のものではなく、大小の差異はあっても、本来的な構造は同様で、お互いの「世界」が交差する可能性を多分にもっているものだと思います。

毎日、子どもと向き合い過ごす日々。それは、一人ひとりの子どもの「世界」に触れる中で、私の「世界」が少しずつ形を変え、広がり、深まり、再構成される営みでもあったように思います。

入園したての子どもたちにとっても、幼稚園という新しい場所で暮らすために、これまでの自分の「世界」を再構成しなければならなかったと思います。その再構成に快を伴い、スムーズに新しい「世界」を獲得する子どももいれば、幼いながらにしっかりと築いてきた自分の「世界」がガラガラと崩れ、再構成に辛い思いを伴った子どももいたと思います。その再構成のお手伝いをするのが、保育者の仕事の一つかもしれません。

入園直後は、なかなか幼稚園が居場所にならずに、何とか自分の身を寄せられる場所を探そうと必死な子どももいました。私の姿が見えなくなると大泣きしたり、おままごとの場所を堅固に囲ってそこから出てこなかったり、片づけになると今まで安心して過ごしてきた遊びの世界を壊されることがこの世の終わりだと言わんばかりに極度に抵抗を示す子どももいました。

しかし、一学期も終わりになると、子どもたちは、担任である私の存在はもちろん、友達の存在もずいぶんとわかるようになり、みんなで一緒にいることが楽しく感じられるようになりました。入園当初は保護者と離れられなかったり、泣いたりするなど不安な様子をあらわにしていた子どもたちも、担任とのつながりを基盤に、徐々に友達とのかかわり

を楽しめるようになり、行動範囲も広がっていきました。生活の流れもずいぶんと体でわかってきたように感じられました。

夏休みを迎えて

やっと、私も子どもたちも幼稚園の生活に慣れてきて、幼稚園で過ごすことが楽しくとも辛くとも生活の一部として位置付いてきたと感じられるころに、夏休みを迎えることになりました。夏休みの予定を楽しそうに話す子どもたち。かく言う私も、四月から無我夢中で走ってきて、少しのんびりする時間が欲しいと感じていました。終業式。慌しくも、何とか無事に全員で夏休みを迎えることができました。

夏休み中に、クラスの一員でもあるインコのピーちゃんをMちゃんの家で預かってもらうことになりました。こちらのアナウンスが遅れてしまったこともあり、終業式の次の日に、Mちゃんはお母さんと幼稚園に取りに来てくれることになりました。

終業式の次の日。幼稚園には普通に出勤するものの、砂場や遊具の準備はしません。八時五十分になっても、外から子どもたちの声は聞こえず、九時になっても廊下をわれ先にと部屋に向かう子どもの姿は見えません。幼稚園が、ただの入れ物になってしまったようで、「幼稚園」にはいるけれど、ここは「幼稚園」ではない、不思議な感覚です。

しばらくして、Mちゃんとお母さんがピーちゃんを引き取りに来てくれました。「Mちゃん！　元気だった？」昨日も会ったはずなのに、そんな言葉をかけてしまった気がします。お母さんは、「Mはよくピーちゃんの話をしていたので、お預かりできてうれしいです。」とお話ししてくださいました。私は、Mちゃんはピーちゃんがいることで、どこかで幼稚園の生活とのつながりを感じて夏休みを過ごすのだろうと感じました。

「ほかの子どもたちはどうだろう?」私は、ふと考えました。楽しい充実した夏休みを一か月以上過ごし、二学期になって幼稚園に来たら、私や幼稚園の生活は忘れてしまっているのではないだろうか。また入園直後のように、「世界」の再構成という大きな課題が子どもたちを待ち受けているのではないだろうか。夏休みも終わりに近づき、二学期が近づくにつれ、私はどんどん不安になっていきました。一学期に築いてきたものが、子どもに「リセット」されてしまっているのではないかという不安がよぎりました。

夏休みはつながっている

始業式。いつも登園の早いHが「おはようございます!」と元気に部屋に入ってきました。お母さんは「早く幼稚園に行きたいって、ずっと言っていたのですよ」とお話ししてくださいました。すぐにコップとタオルと外靴を出し、自分の場所に戸惑うことなく手を伸ばします。「Hちゃん、よく覚えていたね。」私は思わず言葉をかけましたが、Hは笑顔を返すだけ。ほかの子どもたちも続々と登園してきました。夏休みのことを私に一生懸命話してくれたり、久しぶりに会う友達との再会がうれしくてはしゃいだりしながら、ほとんどの子どもが戸惑うことなく、朝の支度を始めます。

「先生! せっけん新しくなってる!!」Hは手を洗いながら、私に言いました。一学期の終わりにはとっても小さくなっていたせっけん。Hは、自分のタオルや靴の置き場所や、小さいせっけんのことをいわゆる「知識」として覚えていた、というわけではないでしょう。一学期に毎日使っていた場所やせっけんと取り結んでいた関係が、Hの「世界」に、Hの体にしっかりと刻まれていたからこそ、一か月以上幼稚園から離れていても、逐一思い出す

必要なく、自然と意識と体が一体となって動いたのだと思います。そして、「あれ……せっけんが違う……」と不意に気づいたのでしょう。

一学期にたくさん探したダンゴムシを採りに、自然と山へ出かける子どもたちも大勢いました。「何で、ダンゴムシ少なくなってるの？」「草がいっぱいになってる！」自然の変化にも自分なりに気づいていく子どもたち。

一学期に落ちている青い柿の実を見つけて、一生懸命拾っていたR。「食べられる？」と私に聞きます。「もう少したつと、大きくなっておいしそうなオレンジ色になるから、それまで待っていようね。」と私が言うと、納得したような納得していないような顔。夏休み明け。Rはいつの間にかオレンジ色に色づいた柿を持って部屋に戻ってきて、「おいしいぞ！」と食べようとしていました。

一学期の経験が地平となり、それぞれの子どもの中に備わっていることをさまざまな姿から感じました。そして、その地平を基盤としつつ、子どもたちなりにいろいろに気づいた変化を驚きやうれしさとして表現し、「世界」を豊かにしていく姿をたくましく思いました。

また、一学期中は朝お母さんと離れられず、「おはようございます」のあいさつが言えなかったAという女の子がいました。しかし、二学期の第一週の金曜日、とても元気に、とても自然に、「おはようございます！」と言って登園してきました。私は初めてのことで、驚きとうれしさを隠せませんでした。すると、Aは私の反応に戸惑ったのか、急に表情を変え、お母さんの影に隠れて、出てこなくなってしまいました。

私は「しまった……」と思いました。Aにとって一学期は辛い朝からのスタートでした。しかし、徐々に私との関係もできてきて、お母さんがいなく

ても、楽しい時間が過ごせるようになってきて夏休みを迎えました。夏休みにはお母さんやお兄ちゃんとゆっくりと過ごしていたようでした。私にとっては、その朝のAの姿は突然のものとしてとらえられても、A自身にとっては、一学期の経験と夏休みの経験を経て、A自身における幼稚園への思いが少しずつ変容した結果としての、その日の朝の姿だったのだと思います。

ほかにも、一学期には自分の思いを言葉で表現することの少なかった子から、「先生、一緒にお外に行こう！」と大きい声で誘われたり、私に触れられることすら嫌がっていた子が「おんぶー」と甘えてきたりと、うれしい驚きがたくさんありました。

一学期と二学期の間に大きな「区切り」があるのは確かだと思いますが、私はそれを「リセット」の時期として、幼稚園生活を「断絶」するものとして感じていたのだと思います。しかし、子どもたちは一学期の経験を充分に「世界」に備えながら、一学期と二学期のつながりを、また、幼稚園生活と家庭生活のつながりをどこかで感じつつ、さまざまに夏休みを過ごしていたのだと、子どもたちの様子からありありと感じました。どうやら止まっていたのは私の時間だけだったようです。日々の保育の中でもさまざまな経験の連続が、さまざまな形に束なっての、今の子どもの姿であることを常に感じていたいと思いました。

（前お茶の水女子大学附属幼稚園　教諭
現同大学大学院　人間文化創成科学研究科）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (21)〉

「みんなでみんなをみる保育」考

― いずみナーサリーでの日々を回想する ―

佐治由美子

平成十九年度、私は、「お茶の水女子大学いずみナーサリー」の保育主任を大学講師と兼任で務めた。異例のことであったこの体験を、そのいきさつから振り返ってみよう。

前年度の秋のこと、前主任が家庭の事情で急遽辞任し、残りの半年間を常勤保育士の中で最も年功を積んでいる者が担任をしながら保育主任を務めた。しかし、いずみナーサリーは対外的な対応、特に見学の依頼が多く、また大学附属であるために出席しなければならない会議も多い。このような雑務を担任の仕事と並行してこなすのは厳しいという状況にあった。

その一方で、いずみナーサリーの規約『国立大学法人お茶の水女子大学保育所規則』では、保育主任は「保育士のうちから学長が委嘱する」と内部から選出されることが定められていた。この問題をどのように解決すべきか、幼保プロジェクトは保育士たちと共に頭を抱えることになった。

大学としては、当時外部から主任を入れることはできなかったが、大学教員が兼務する形であれば特に問題にはならなかった。ナーサリーとしては、現場に常駐する主任を求めていたものの、それはかな

わなかった。そこで、兼務という範囲内で幼保プロジェクトの講師が主任を務め、大学附属としての会議に代表として出席すること、必要に応じて対外的なことや保護者との対応をすること、そして毎日のミーティングにまとめ役として同席することなどが決められた。これは、ナーサリーにとっては新しい形の主任を試みることを意味し、私共にとっては思いがけない実験（アクションリサーチ）の機会を得ることになった。こうして、プロジェクト内の互選により、それまで観察者としてかかわってきていた私がその役に就くことになったのである。

幼保プロジェクトには三人の専属講師がおり、それぞれがカリキュラム改革を手掛けながら保育現場とのかかわりをもっている。大学と幼稚園とナーサリーが協働するという意味において三者がトライアングルを形成していくときに、保育主任という役割をとりながら大学とナーサリーの間をどのようにつないでいくことができるのか。私の模索はここから始まった。

駆け抜けるように過ごした一年間を私なりに振り返ってみると、それは大学とナーサリーがつながるためのパイプを太くする働きというより、そのトライアングルの一辺をていねいに磨いて澄んだ響きが奏でられるよう準備する働きであったように思う。

次に、着任後間もなく出合った保育観をめぐるやりとりについて考えたことを述べていく。

ナーサリーの保育方針をめぐる問い

新年度がスタートしてひと月ほどたったころ、保護者会の準備を進めていく中で保護者に示す保育方針を定めるという話になった。まず、この時点で私には疑問が生じた。

ナーサリーの歴史は、確かに浅い。百三十年以上

の歴史を重ねる隣の附属幼稚園に比べると、生まれたばかりという短さである。しかし、「いずみ保育所」時代から創りあげてきた五年間という歩みがある。その中で編み出された保育には、保育士たちが経験的に共有してきた独自の指針がすでにあるはずだと私は思った。それは、平成十八年度に作られたパンフレット（メッセージブック）において具体的に公表されてもいたが、それでもまだ充分に言語化されていない部分があり、そのことを一緒に明らかにしていくことが私の果たすべき役割ではないかと考えた。そこで私は「これまでどんなことを大切にして保育をしてきたのか」と、保育士たちに問い直してみた。すると、「みんなでみんなをみる保育」という答えが返ってきたのである。

平成十四年に十名の利用者が登録をしてスタートした「いずみ保育所」が、「いずみナーサリー」に衣替えした平成十七年以降少しずつ利用者を増やし、平成十九年度末には二十六名の乳幼児が定期的に通う場となった。ところが、就学・就労する女性の支援を目指す学内保育所であるため、保護者にとって利用しやすいフレキシブルな時間及び曜日対応をしている。二十六名の在籍といえども実質は日々十名前後が入れ替わり立ち替わり集うという形で、集団の小ささは変わらないままなのである。したがって、このような小規模園であるからこそ保育士がみんなで子どもたちをみていくことができる。また、子どもたちも、どの保育士にも親しみをもっ

て安心して過ごすことができるという考えを基盤にして、「みんなでみんなをみる保育」の実現を目指してきたということであった。

また、いずみナーサリーのデーリー・プログラムからも、このことは考えられていた。〇～一歳児と一～二歳児の二クラスに分かれて一日をスタートするが、朝の登園時間がまだ担任の出勤時間でない場合もある。子どもが預けられるときに不安が少なくなるように、担任ではない保育士もクラスを超えて子どもたちと関係づくりをしておく必要があった。そして、午前中は年齢別の活動が中心になるが午睡後の活動は広い保育室を異年齢混合で過ごすので、保育士も自然にクラスを超えたかかわりができるようになっている。

私は、これまで大切にされてきた保育を共に体験しながら私なりに課題として考えていきたいと思い、「みんなでみんなをみる保育」を現状として行っていることを保護者会でお伝えすることにした。こうして、新年度の歩みは滑りだしたのである。

みんなでみるのは？

「みんなでみんなをみる」とは、子どもの何をみることなのだろうか？　私は、保育士一人ひとりの保育を見つつ話を聞く機会をもっていった。保育士たちの中には、保育の場では幼い時期から徐々に集団へ適応していくことが大切だという考えや、個の生活を大切にしつつ集団の楽しさも体験してほしいという考えなど、いろいろな保育観が混じり合っているようであった。

ここで、個と集団のかかわりについて考えてみることにしよう。二歳を過ぎるころから、子どもたちは保育者に密着した遊びに満足すると、そこを起点として動きによる空間的な広がりを見せたり、そこで新たに出会った人たちとさらなる遊びの展開を始

めたりする。この流れは、個から集団への移行のプロセスととらえることもできるが、ここでは子どもの内面に即した見方をしていきたい。三月のある日の保育を、記録から抜粋して考えていくことにする。

Ｈ（三歳男児）、Ｌ（二歳八か月女児）、Ｙ（三歳男児）、Ｅ（二歳四か月男児）の四人は、保育士ＫとＳ（筆者）の二人と一緒に粘土でお弁当のおかず作りを始める。間もなくＹとＥは粘土のコーナーを離れてそれぞれに電車で遊んだりまた戻ったりしている。おかずの数も増えてきたので、保育士Ｋがおままごとのお弁当箱をもってくると、Ｌはていねいに詰め始める。すると、Ｅは小皿を取りに行き粘土のミートボールを並べて「いらっしゃいませ～」とテーブルの周りを歩きだしたので「一つください」と声をかけると「どうぞ～」と新たな遊びが展開する。その傍らで、おかずを詰め終えたＬがお弁当箱を手に持ってうれしそうに歩いている。おままごとコーナーではＹが茶色の粘土をお鍋に入れてかき混ぜている。そこへ移動してきたＨが粘土で作ってもらったゆで卵を「これ切るの」と言うので、Ｓがまな板と包丁を用意すると小さな卵を細かく切り分けている。「小さく切るの、上手ね」と声をかけると「みんなに分けてあげるの」という言葉が返ってくる。

小麦粉粘土遊びに満足したＨは、遊びの最後に「みんなに分けて」あげようとしている。二歳になると、みんなで一緒にやりたい思いが表現される遊びはたびたび見られる。個々の思いが保育士にていねいに受け止められその子の存在が確かなものになると、子どもは自ら周囲に目を向け子ども同士の関係へと向かっていく。が、子ども同士の関係は必ず

しもうまくいかない。そこで、保育士との関係に戻ったり、その場で保育士の助けを必要としたりする。このように多様な関係の中を行ったり来たりする往復運動が、この時期の子どもたちの発達の姿でもある。この動きを子どもが自在にダイナミックにできるような保育の形態こそ、子どもの発達を保障し得ると私は考える。「みんなでみる」のは、子どものみんなであり、また一人ひとりでもある。一人ひとりの顔の見えるみんなを考えていきたいものである。保育士が個と集団の関係を柔軟に考えていくためには、保育士同士の連携が欠かせないと思う。それも、保育士一人ひとりが生かされる連携でなければ、保育そのものが生きたものになっていかないように思うのである。

この日の午睡明け、Hは目を開けるとボンヤリとした表情で保育士Kに向かって「お弁当楽しかったねぇ」と言ったという。子どもたちは、大人の考える個とか集団という枠組みにとらわれることなく、いつでも他者と生きることを楽しもうとする人たちなのである。

平成二十年度よりいずみナーサリーには新しい主任が着任している。内部から選ばれる保育主任ではなく、主任保育士として外部から迎えている。常駐の主任でなければ対応しきれない問題が保育の場にあることを、大学に認められてのことである。「みんなでみんなをみる保育」という課題も、こうしてまた新たな局面が開かれようとしている。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

参考文献

刑部育子
『ナーサリーパンフレットのデザインプロセスを通した協働的学び』 日本保育学会第六十回大会発表論文集、三百四十八～三百四十九頁（二〇〇七）

編集後記

『幼児の教育』が電子媒体に載ることで印刷媒体としての本誌の姿勢は変わるのか、厳しく問われているが、電子マガジンになるわけではない。冊子としての本誌の画像を“資料（史料）”として公開するまでである。印刷物としての『幼児の教育』誌として今後さらに可能性を追求していきたい。

冊子は、重みを腕に伝え、紙質は手加減を誘い、脈絡を追うようにとページを繰らせる。1冊に包含される「知」のまとまり具合を人は身体で直観する。ことに保育とかかわる人の中には、紙を通した記述と思考を大切にする方が多いのも痛感するところである。ネット上で過去の「幼児の教育」に触れていただく際には、その二次元世界の背景に深く広がる奥行きにもアクセスしていただけるものと信じたい。　(H)

幼児の教育　第107巻　第9号

平成20年9月1日発行
編集兼発行人　浜口順子
編集部　永山　綾
発行所　日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所　株式会社　フレーベル館
☎03-5395-6604（編集）
振　替　00190-2-19640
印刷所　図書印刷株式会社
定　価　550円（本体524円）

©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵　佐藤奈々
扉カット　佐藤奈々
扉題字　津守　眞
カット　斎藤明子
編集委員　伊集院理子
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613（営業）

次号予告

〈特集〉子どもと建物・環境

仙田　満・永井理恵子・向山陽子・鈴木陽子

・「今、ここ」から創りだす探求型の学び　片岡康子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。

はがき：〒113-8611　東京都文京区本駒込6-14-9（株）フレーベル館
「幼児の教育」編集部
Fax：03-5395-6622　E-mail：youjimail@yahoo.co.jp

Nocco ノッコ セレクト vol.2

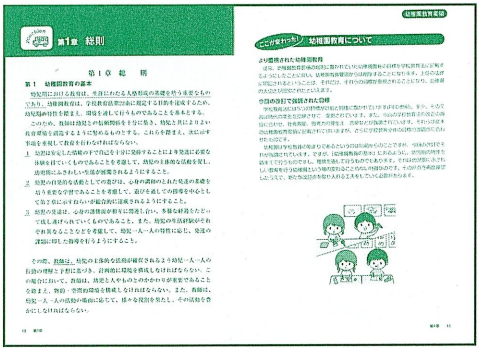
NEW ここが変わった！

幼稚園教育要領・保育所保育指針 ガイドブック

無藤 隆・民秋 言／著

21×15cm／128頁 定価525円（税込）
106-02

平成20年の改訂に合わせて「何が変わり、どのように保育に活かせばよいのか」をわかりやすく解説。幼稚園教育要領と保育所保育指針の条文を全文掲載。
保育界の動向を知り、これからの保育を考えるための必読の本。

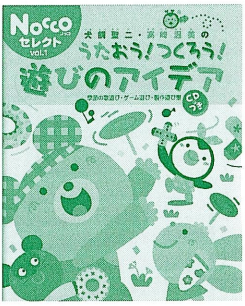


好評発売中！

Noccoセレクト vol.1

犬飼聖二・高崎温美の
うたおう！つくろう！遊びのアイデア（CDつき）

犬飼聖二・高崎温美／著



26×21cm／80頁+CD1枚 定価2,415円（税込）
106-01

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

最新刊

フレーベル館創立100周年記念出版

倉橋惣三文庫　＜全10巻＞

倉橋に学び、保育を極める。
日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋惣三文庫⑤

幼稚園雑草（上）

倉橋惣三/著

倉橋保育の原点がわかる初期の小論や随筆を集めた『幼稚園雑草』の前半部分を収載。

108-05

18×12cm　276頁　定価1,260円(税込)

倉橋惣三文庫⑥

幼稚園雑草（下）

倉橋惣三/著　上垣内伸子/解説

『幼稚園雑草』の後半部分を収載。気鋭の倉橋研究者・上垣内伸子（十文字学園女子大学教授）の書き下ろし解説を付す。

108-06

18×12cm　220頁　定価1,260円(税込)

好評発売中

① 幼稚園真諦

倉橋惣三/著　柴崎正行/解説

18×12cm　148頁　定価1,155円(税込)

② 子供讃歌

倉橋惣三/著　森上史朗/解説

18×12cm　236頁　定価1,260円(税込)

③ 育ての心（上）

倉橋惣三/著

18×12cm　180頁　定価1,155円(税込)

④ 育ての心（下）

倉橋惣三/著　大豆生田啓友/解説

18×12cm　244頁　定価1,260円(税込)

続刊予定

⑦子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（上）
⑧子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事（下）
⑨倉橋惣三・その人と思想
⑩倉橋惣三と現代保育（仮題）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。